

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

奈良盆地における藁の大蛇： 日本・中国における龍蛇信仰の比較研究に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 野神, 端午, 龍蛇, 藁蛇, 雨乞い キーワード (En): 作成者: 牛, 承彪 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006124

奈良盆地における藁の大蛇

—日本・中国における龍蛇信仰の比較研究に向けて—

牛 承 彪

要 旨

5, 6月、奈良盆地に藁の大蛇が登場する民俗行事が行われてきたが、これまでは「野神祭り」の範疇に入れて研究し、発生についても綱掛け行事との関連を中心に考えられてきた。本稿では現地調査に基づいて藁の大蛇行事の構造・信仰対象の性格を考察し、先学の研究を踏まえながら藁の大蛇行事に含まれる諸要素を整理・検討した。行事は予め豊作祈願・災厄駆除の目的で行われたものであるが、信仰対象は崇り神の一面を持ち、それによって行事に特異性を呈するようになる。また信仰対象を顕在化し、その生態を演じることから芸術的性格も帯びる。藁の大蛇と共通の要素を持つ近隣地域の信仰や行事と比較分析し、さらに日本全国の雨乞い習俗と比較しながら、その発生・展開過程において、不定期の行事から定期的行事へと定着する可能性を提示した。最後にはこれまで日本の研究者が確認できなかった中国における藁の龍蛇行事を取り上げ、比較研究の将来性を展望した。

キーワード：野神、端午、龍蛇、藁蛇、雨乞い

第一章 はじめに

日本と中国において、藁などの材料を用いて龍蛇を作って、祭ったり巡行したりする民俗行事が多くあり、行事が行われる期日・行事の目的・龍蛇の形態・用いた材料・行事の内容などによってさまざまな分類ができる¹。またこの龍蛇信仰及び雨乞い習俗の分野において、日本と中国の比較研究は十分可能である。本稿ではこれまで行ってきた調査に基づきながら、奈良盆地の藁の大蛇行事の構成や展開における特質を考察し、これを将来のさらに詳細な比較研究に向けての土台にしたいと思う。

奈良県などの農耕地域では、村から少し離れた場所や水路・池の脇にある塚・小さい森・大木などに祭られる神を信仰対象に、「野神祭り」という行事が行われてきた。「ノガミ」という言葉は、行事の名前として使われたり、信仰の対象を表したり、神を祭る場所を指したりして、多くの意味が含まれ、かつ広い地域にわたって分布している²。奈良盆地において「野神祭り」は地域的特徴から、奈良盆地の北部と奈良盆地の中南部の二つに分けられている。前者は野神塚や神木に飼牛を連れて参ったりすることが行事の主な内容になっており、後者は藁の大蛇を

作りノガミの神木に巻きつけたりすることが行事の主な内容になっている。

この中、藁の大蛇が登場する行事は、最も早く研究者に注目されたものでもある。大正13年の『郷土趣味』三月号には「大和の綱掛けの神事」（田中俊次）が掲載され、昭和5年の『諸国奇風俗を尋ねて』では「大和蛇穴きらぎの汁掛祭」（松川三郎）が紹介されている。昭和8年の『旅と伝説』（崎山卯佐衛門）においては高市郡眞菅村五井・北妙法寺・地黄の事例が紹介された³。その後の調査報告や研究は、昭和19年の辻本好孝の『和州祭礼記』（磯城郡川東村大字鍵・大字今里等6つの事例）、昭和30年の保仙純剛の「大和ノガミ〔野神〕資料」（『近畿民俗』17号－9つの事例）、昭和32年の笹谷良造の「シャカシャカ祭」（『近畿民俗』22号）などがある。

これらの資料で紹介された事例は、いずれも奈良盆地の中部と南部のものであり、いずれも特異性をもった行事として扱われている。昭和32年以降は保仙純剛をはじめ、笹谷良造・栢木喜一・米田豊等の研究者が精力的に調査と研究を展開し、考察範囲も次第に奈良盆地全体や滋賀県へ広がり、四国などの事例とも比較をしながら進めている。これらの研究によって野神祭りの全体像が見えるようになった。また無形文化財としての調査が進むにつれて、昭和60年に奈良県教育委員会は資料集『大和の野神行事』を完成させた。

最近の重要な研究として松崎憲三の「ノガミ（野神）信仰再考—奈良盆地における地域的展開」⁴と樽井由紀の「奈良盆地のノガミ行事の民俗学的研究」⁵を掲げることができる。この二つの論考では、それまでの研究の問題点を指摘している。つまり、野神の概念をはっきりせずに調査研究を進めてきたこと。野神信仰は地域の特徴があり、その受容・展開過程をトレースすることは史（資）料的に難しいこと。祖霊信仰や崇り神信仰などをもって奈良盆地の野神信仰を解釈することができず、地域の特徴を重視すべきことなどである。

第二章 巡行する藁の大蛇の特質

（一）今里の事例からみた行事の構造

奈良盆地のノガミ行事に藁の大蛇が登場する事例は、その行われる時期によって大きく二つのグループに分けられる。5、6月のグループと1、2月のグループである。5、6月のグループの事例には藁の大蛇の形態がより顕著に表現されている。ここでは田原本町今里の事例を通してこれらの行事の基本構造を把握する。以下2008年に調査を実施した時の様子である。

行事の期日は、昔は旧暦の5月5日だったが、現在は毎年6月の初めての日曜日になっている。毎年3戸の当屋を中心に行事が行われ、昨年の当屋と来年の当屋もこれに加わって、9戸が行事をつとめる。村は90戸からなっているので、30年に一回の順番で回ってくることになる。大人の当屋は世話役で、主役は12歳から15歳までの「頭もち」と呼ばれる子供たちである。巡行の際は蛇体作りを手伝う大人や12歳以下の子供も参加する。

去年安置した蛇体は新しいものに替えるため、前日までに去年の蛇体を木から下ろして燃やす。前日の晩に子供たちは柳の木を切って、鋤、鍬、梯、槌などの農具の模型を作る。

当日の午後1時ごろになると、当屋を始め、蛇体作りをする大人や行事に参加する子供たちは青の法被に白いズボン姿で村の杵築神社に続々と集まってくる。一同は拝殿前に立ち並んで礼拝し、大人たちは蛇作りを開始する。材料は12束の麦わらである。まずは大人たちだけで蛇の頭を作り、その後行事に参加する子供たちも加わって胴体を作る。作り上げた蛇体は18メートルもあり、これを16本の稲かけの足で支え、16本の女竹をもたげる。蛇の頭には葉っぱがついた檜の木の枝を数本差し込む。蛇体は蛇の頭を神社に向けた形で祭られる。



写真1：今里の蛇巻き（2008年調査）

神社の前に長机が置かれ、その上に左から順番に、味噌煮わかめ、お米・お塩・お水、神酒二本、生節・タコが供えられている。拝殿内では頭もちは神社に向けて礼拝し、蛇の頭に神酒を振りかける。それから少年たちは拝殿の中で用意された御膳をいただく。拝殿の外では当屋の家から運んできたわかめの味噌煮を周りの観光客に振る舞う。

午後4時ごろ、4人の頭もちは蛇の頭を担ぎ、5、6人の大人と10数人の子供たちは蛇の胴体を担いで、村中を回る（写真1）。各家の玄関に蛇の頭を突き出し、みんな一斉に「おめでとう」と叫ぶ。道のやや広い所にくるとみんなが蛇体で巻きあう。子どもたちは巻かれて下敷きになりながら楽しく戯れる。このように一軒一軒村すべての家を回り、最後神社に戻るときは夕暮れ近くになる。

続いて蛇の頭を上、胴体を下にして神社境内にある榎の木に巻きつける。蛇の頭は今年の「アキ」の方向へ向ける。蛇体組みたてのときに使われた女竹は榎の根元の周りに立てられ、蛇のしっぽで巻きつける。蛇の頭は上に向いているので、これを「昇り竜」と呼んでいる。

この作業が終わると、榎の根元にある祠の前で最終の祭典を行う。供え物には前日作った10種類の農具木型、墨で描いた馬と牛の絵馬、スルメがある。この祠は八大竜王さんと呼ばれ、すぐ横にある小さい祠は初王神と呼ばれる。当屋および頭もちは、祠の前に敷いたシートに座って、祠に向かって礼拝し、清酒にスルメを肴にして直会をする（子供たちにはお茶）。これで行事が終了する。

上の行事は当屋という農村祭祀組織によって主催され、端午の節句の日に子供を主体に行われたものである。「八大竜王」と「初王神」を信仰対象としているが、当日の行事は藁の大蛇を登場させることが主な内容になっており、大きく「藁蛇の製作と祭り」、「大蛇の巡行」、「大蛇の安置」という三つの部分から構成されている。

(二) 5, 6月に行われる行事の比較

今里の事例に照らしてその他の事例をみる場合、同じような構造を呈していることがわかる(表1を参照)。ここではいくつかの項目に分けてみることにする。

(1) 行事の名称：

「ジャマキ」と呼ばれるのは今里・鍵だけで、藁の蛇を担いで村を回る時、互いに巻きついたり通行人を巻きついたりすることに由来する。地黄町では作った藁の蛇を円形に巻いて固定するが、これも「ジャマキ」と呼ばれている(写真2)。上品寺の「シャカシャカ」は藁の摩擦の音から来たという。地黄町の「スミツケ」は蛇を組み立てる前に子供たちが墨で付け合うことに由来する。石見・平等坊では「ノガミさん」と呼んでいるが、信仰対象の名称でもある。小綱・蛇穴の「ノグチサン」は信仰対象の大蛇を呼ぶものである。矢部の「ツナカケ」は最後に綱を大木に掛けることからきている。下永の「キョウ」の意味は不明である。名称の多くは行事における藁の形態と藁蛇に象徴される信仰対象から名づけられたものである。



写真2：地黄町の墨付け(2010年調査)

(2) 行事の期日：

5, 6月の5日、または第一・第二の日曜日になっているが、これは新旧暦の使用によるもの、または行事の主体である子供の都合で生じたものである。かつては端午の節句の日に行われた。

(3) 信仰対象：

大きく八大竜王信仰(八王寺・ハッタさん)、大蛇信仰(ノガミ・ノーガミさん・ノグツツアン・巳さん)、塚信仰(塚・野神塚・ノガミサンの塚)、大木信仰(ヨノミの木・ナツメの木・榎の木)に分けられる。八大竜王は仏教の護法の神で、雨と水を司る。平安時代から宮廷における雨乞いの祈願対象になっている。大蛇は水の神であり、特に靈験のあるのは白蛇である。大木(ヨノミの木が多い)は蛇の分身、または蛇の住処として意識されている。

(4) 藁の蛇についての呼称・材料等：

作られた藁の蛇を「ジャ」と呼ぶのは6例、「綱」と呼ぶのが2例ある。また漢字の「蛇」と書いたのも3例があって、読みは明らかではない。用いられている材料は麦藁と稲藁とがあるが、ほとんどの事例では稲藁を使っている。

(5) 行事の内容：

藁で作られた龍蛇の形と長さはまちまちである。しかしいずれも水神の龍蛇を形として表現されたものである。作られた藁の龍蛇は一旦作られた場所で神霊として祭られ、その後村はそれぞれの小さい森や木のあるところまで移動して木に巻きついたり、掛けたり、あるいは木の元に置いたりする。用意された供え物と一緒に牛・馬などを描いた絵馬や小さい農具の模型を供え

る。そして簡単な食事を取ったり、儀式を行ったりして村へ帰る。藁の龍蛇を目的地まで運ぶ過程における様相によって大きく二つのグループに分けることができる。

①目立った行動を取らずに藁の龍蛇を目的地まで移動する事例：

○橿原市地黄町の「スミつけ祭り」では、夕方、稲藁を使って約5メートルの「ジャマキ」を作り、絵馬・農具の模型を、供え物と一緒に「ジャマキ」の前に供えておく。そして次の日の早朝子供たちは「ジャ」を塚（小さい森）に持っていく。ジャはヨノミの木の根元にとぐろを巻かせ、かま首を上げて木に登らせる。

○橿原市小網町の「ノグチサン」では、もちわらを使って、約5メートルの「ジャ」を作って竹の輪にとぐろ巻きに置き、画用紙に牛と農具の絵を書く。大人二人でジャを担いで塚に持っていき、榎木に絵を貼り付け、蛇網をそのまま置く。

○三宅町石見の「ノガミサン」では、稲藁を使って約3メートルの「ジャ」を作る。ジャを梯子の上に乗せてノガミ塚まで担いでいき、塚にある祠の裏側に置く。

○磯城郡川西町下永東城と西城の「キョウ」では、前日じゃじゃ馬（へび）・コモクサ（餌）などを作る。梅檀の小枝で葺いた籠に収めて塚へ運び、ヨミノ木の前に据える、または木に掛ける。

②一定の行動を伴いながら藁の龍蛇を目的地まで移動する事例：

○上述田原本町今里の「蛇巻き」の例。

○田原本町矢部の「綱掛け」では、藁の綱を作り、藁の丈ほどに藁を一面に吊る。そして綱を担いで村中を練り回り（写真3）、綱掛けの木に掛ける⁶。

○田原本町鍵の「ジャマキ」では、稲藁と麦藁を使って「ジャ」を作り、供え物を供える。子供たちがジャを担いで村落の主な道路を巡行し、慶事のある家を訪問する（写真4）。最後は村の外れにある榎木に巻きつける。

○橿原市上品寺町の「シャカシャカ祭り」では、子供たちは作った「ジャ」を担いで村を巡回するが、幾つかの池に「ジャ」を漬けて水を飲ませたり、「ジャ」を池に漬けたまま子供たちは一緒に戯れ遊ぶ⁷（写真5）。最後は村の南にある榎に巻



写真3：矢部の綱かけ（2011年調査）



写真4：鍵の蛇巻き（2008年調査）



写真5：上品寺のシャカシャカ（2010年調査）

きつける。

○天理市平等坊町の「ノガミサン」では、蛇を担いで塚に向かう途中、川・用水路に蛇を担いだまま飛び込み、泥まみれになりながらいく。最後は木に巻き付けるが、頭をアキの方に向ける。

○御所市大字蛇穴の「ノグチサン」では、前日蛇頭を組み、当日蛇網を組む。青年団員が村中の家を歴訪し、祝儀を受ける(写真6)。その後子供たちは蛇網を担いで巡行し、各家の前で蛇網を揺さぶる。最後は神社の木に巻きつける⁸。



写真6：蛇穴のノグチサン（2011年調査）

表1：5、6月の藁の大蛇が登場するノガミ行事

名称と地域	実施期日	信仰対象	呼称・材料等	行事の内容
1 今里のジャマキ(田原本町今里)	6月5日(昔は節句の日)	八王寺、野神。(ヨノミの木。龍神信仰あり)	ジャ。麦藁(12束)	蛇を作り、農具の模型を作る。子供たちがジャを担いで、家々を回りながら祝福する。途中で人を巻きつける。榎木に巻きつけ、頭部を上にする。
2 上品寺のシャカシャカ祭り(樫原市上品寺町)	6月5日(昔は節句の日)	ノガミサン。(ヨノミの木。治水・大蛇の伝承あり)	ジャ。麦藁(約5m、口・舌)	当屋の家で蛇を作る。子供たちが担いで村を巡回する。池にジャを漬けて水を飲ませ、子供たちが一緒に戯れ遊ぶ。榎木に頭部を上にして巻きつける。
3 地黄町のスミつけ祭り(樫原市地黄町)	5月5日(昔は節句の日)	ノガミサン・ノグツア。 (塚・ヨノミの木。雨乞い意識あり)	ジャマキ。稲藁(約5m、足8本・角2本・舌3つ)	4日午後子供たちは墨の付け合いをする。夕方ジャを作って絵馬を書き、農具の模型を作る。5日早朝子供たちがジャを塚に持っていく。ヨノミの木の根元にとぐろを巻かせ、かま首を上げて木に登らせる。
4 小網のノグチサン(樫原市小網町)	6月4日(昔は5月)	野神塚・野神さん。(ヨノミの木。白蛇の伝承あり)	ジャ。もちわら(12把、約5m)	ジャを作って竹の輪にとぐろ巻きに置き、画用紙に牛と農具の絵を書く。大人二人でジャを担いで塚に持っていく。
5 鍵のジャマキ(田原本町鍵)	6月5日(昔は節句の日)	「ハッタさん」。(ヨノミの木。龍神信仰あり)	蛇網。稲と麦藁(稲藁350把・麦藁3束)。	大人がジャを作り、子供たちが農具模型を作る。子供たちがジャを担いで村落の主な道路と慶事のある家を巡回する。頭を地面に置き、尻尾を榎木に巻きつける。
6 石見のノガミサン(三宅町石見)	5月5日(昔は節句の日)	ノガミサンの塚。巳さん。	ジャ。稲藁(10~13把、約3m、口・舌)	当屋がジャを作る。ジャを梯子の上に乗せてノガミ塚まで担いでいき、塚にある祠の裏側に置く。
7 平等坊のノガミサン(天理市平等坊町)	5月5日(昔は6月)	ノガミサン。(ヨノミの木。雨乞い意識あり)	蛇。麦藁(麦藁5束・稲藁50把・耳2つ)。	子供たちが蛇を担いで塚に向かう。途中川・用水路に蛇を担いだまま飛び込み泥まみれになる。頭はアキの方に向け、胴は下の方へして木に巻きつける。
8 矢部の綱掛け(田原本町矢部)	5月5日(昔は旧暦)	ナツメの木。(タタリの伝承あり)	綱。藁(約4間)	藁の綱を作り、藁を一面に吊る。綱を担いで村中を練り歩く。綱掛けの木に掛け、農具模型・版木刷りの牛の図・稲苗などを入れた竹籠を吊る。
9 蛇穴のノグチサン(御所市大字蛇穴)	5月5日	榎の木(本はヨノミの木)	ジャ。藁(蛇は長さ6m、径22cm)	前日蛇頭を組み、当日蛇網を組む。若者は家々を歴訪し、祝儀を受ける。子供たちが蛇網を担いで巡行し、各家の前で蛇網を揺さぶる。木に巻きつける。
10 下永のキョウ1(磯城郡川西町・東城のキョウ)	6月第二の日曜(昔は節句の日)	ノーガミサン。(ヨノミの木。ミーさん伝説あり)	メスの蛇(約3m、目玉あり)	前日じゃじゃ馬・コモクサなどを作る。梅檀の小枝で葺いた籠に収めて塚へ運び、ヨミノ木の前に据える。塚の入口でコモクサを投げ込む。
11 下永のキョウ2(磯城郡川西町・西城のキョウ)	6月第二の日曜(昔は節句の日)	ノーガミサン。(ヨノミの木。たたりの伝説あり)	オスの蛇。麦藁(2束・縄。約3m。目玉あり)	東城の場合と同じ。ただし、ジャジャ馬をヨノミの幹に上らせる。

※奈良県教育委員会の「大和の野神行事」と筆者の現地調査に基づいてまとめた。

(三) 信仰対象の性格

野神の信仰をめぐって、先学は奈良盆地のすべての事例を視野に入れながら水神・牛の守護神・農神との関係を論じてきた。桜井徳太郎は「水神的性格をもつと同時に、牛を守護するための守り神、ないし農神的性格をもっているということができよう。そして両者は、最終的に農業神として合致する。すなわち野神の性格は発展して、農業の守護神、牛の守護神になる」と論じた⁹。これにたいして、保仙純剛は「わらの蛇体（水神）は、牛の守護神として現れるのではなく、降雨の祈願を受け取る水神として現れるのではないか」と述べている¹⁰。ここの「牛の守護神」とは奈良盆地北部地域の行事に見られる信仰であって、中部と南部地域には顕著なものではない。また保仙純剛が述べた内容は藁の大蛇と供物としての牛の絵馬との関係から引き出したものである。しかし、藁の大蛇が登場する事例に限ってみる場合、顕著に見られるのは水神的性格である。

田原本町今里では蛇巻き行事をめぐって次の伝説がある。昔、雄の竜がいて村中の若い娘を食い、赤ん坊も食い、果ては農作物まで食い荒らした。一人の僧が通りかかり、村人たちに「五月の節句に、菖蒲で太刀を作って家々に飾るとよい」と教えた。竜は驚いて中街道のエノキの上に隠れた。また鍵の村では、大きなムジナが現れて人を取り、田畑を荒らした。そこへ今里の竜がきて東の藪でムジナとけんかして殺した。村人は喜んでその藪に竜を祭り、「蛇巻き」を行った¹¹。この伝説から信仰対象は竜神であること、竜は善と悪の両面性を持っていることなどが読み取れる。

橿原市上品寺町のシャカシャカ祭り行事の由来について次の言い伝えがある。この村には長男が生まれると、五月五日の晩にノガミさんに人身御供として差し出す習慣があった。ある時、九州から来た青年がいて、ノガミは神ではなく魔性のものであるという。予想通りそれは大蛇であったので、村人は一緒にこれを退治した。それで人身御供の代わりに、大蛇の命日に藁で大蛇をかたどり、葬った場所に連れて行って供養するようになった。ここの人身御供は川の神にささげる犠牲であり、この伝説の背後にはやはり治水、または雨乞い習俗が隠されている¹²。

藁の大蛇をめぐるとの言い伝えや行事の意味についての認識は、他の藁の蛇を作る村にも伝えられている。

○橿原市小綱町では、野神塚には白い蛇が棲んでいるという。

○三宅町石見では、ノガミは農家のカミサンで、御神体はミーサン（巳さん）であるという。

○橿原市見瀬町では、神社には大きな蛇がいて、それが信仰対象で、同じ形のをワラで作って、鳥居前の榎の木にかけ渡すという。

○御所市大字蛇穴では、野口行事は豊作祈願であり、当屋で祭る蛇体は水神であるという。

○磯城郡川西町下永（東城）では、野神さんは五穀豊穰の神。塚にはミーサンがいるという。

○磯城郡川西町下永（西城）では、ヨノミの木に巻き上らせたジャジャ馬の目玉が早く落ち

ると雨が多く、両方早く落ちると大水になるという。

ここの「白い蛇」「大きな蛇」「ミーサン」「蛇」「ジャジャ馬」は水神を意味するものであり、五穀豊穡の神である。行事は豊作祈願をするためのものである。檀原市地黄町の墨付け行事において、蛇を木に巻きつけ、上らせるのは雨乞いの祈りであると古老達はいう。また天理市平等坊町では藁の蛇は雨の龍であって、この行事は田植えのための祈雨であるという¹³。

藁の大蛇が象徴するのは水神であり、行事は雨乞いとして意識されているのである。一方藁の大蛇は又「守り神」的性格を帯びており、その巡行は慶事のある家、またはすべての家々を回って祝福するものであり、今里の言い伝えが象徴するように、邪悪なものを退治する役割を果たしている。さらに「この神事を取りやめると、その年は田が荒れて不作になり、悪疫が流行すると言いつたられている」のは¹⁴、崇り神的性格を反映したものである。このような複合的な性格は大蛇という信仰対象の性格そのものである。

藁の大蛇が巡行する過程において川や溝に飛び込んで泥まみれになったり、巻き付けをしたりする行動を「暴れ」という言葉で表されているが、これは信仰対象の「暴れ」である。かつては今里では、住民から嫌われる家の前では、蛇体はその門口に突っ込んだままなかなか動こうとしなかった。隣村の鍵では、もし祝儀が足りなくて気に入らなかつたら、大きな蛇体はその家の門口に抛り込まれ、子供たちはわっと喊声をあげて引き揚げる。甚だしいときには座敷の上へ投げ込まれる。その蛇体を勝手に持ち運びできないので、当屋に泣きすがって解決をしてもらう。祝儀の値上がりはもちろんである。また蛇体を田んぼの中へ投げ込んだりして散々に暴れるが、暴れる動作が激しいほどその年は豊作だという。大蛇の生命力が旺盛なほど、豊作になるので、この巡行は水神の霊力を発散する過程でもある。またその「暴れ」の過程に一部の村民に対する制裁の性質を帯びたものもあるが、大蛇の崇り神的性格を利用したものである。これらの行事が特異性を呈しているのは、まさにこの水神の性格によるものと言える。

神社や当屋の家で作られたばかりの藁の「ジャ」にはまだ神としての性格は帯びていない。それが祭られたり、女竹にもたげられたり、榎の若枝が差し込まれるなど飾られることで神としての身なりが整えられ、さらに神酒が振りかけられることによって、生命を持つようになる。そして担ぎ出され、村を練り歩き、揺さぶられたり、田んぼで暴れたり、川や池で水を飲んだりするのだが、命のある水神の生態を演じており、一種の芸能的要素を帯びたものとして解釈することも可能である。

第三章 藁の大蛇行事の影響関係について

奈良盆地における藁の大蛇が登場する行事の発生を考える上で、文献による追及は難しいと先学が述べている。しかし関係の行事との比較から、ある程度その発生・変遷過程を推測する

ことは可能である。

(一) 綱掛け行事

米田豊は、ノガミ(藁蛇)の性格を「田の神」「水霊の象徴」「予祝的要素」「魔除け・祓えの機能」「通過儀礼」などの面から考察し、東部地域のカンジョウカケ行事と藁蛇の行事と共通の特徴がみられることから「カンジョウカケ」から「藁蛇」へ変容し、さらに「藁蛇」→「藁牛」→「飼牛」という変遷を描いている¹⁵。

「カンジョウカケ」は「カンジョウナワ」「綱かけ」とも呼ばれ、日本全国にみられる道切り行事である。一般的には藁で太い綱を編み、村の入り口などの境のところに吊るすのだが、中に蛇の形をしたものもある。機能としては災厄を村外に追い出す、または侵入を防ぐものであるが、藁の霊力に基づいた信仰とされている。現在見られる奈良盆地の「綱掛け」は自分の特徴をもっている。

○奈良盆地東南の山地に近い明日香村の稲淵と栢森の綱掛けは、川の上をまたがって掛けており、オスとメスの綱として意識されている。

○桜井市江包と大西の両村ではそれぞれ藁で男女のシンボルを象徴する綱を作り、村の主な道路を練り歩いたり、若者たちは田んぼに入って相撲を取ったりしながら、スサノオ神社の鳥居の前に担いできて合体させる。そして男綱の片方は鳥居の東の木に巻きつけ、雌綱の片方は西にある大和川を渡って川岸の榎木に巻きつける(写真7)。



写真7：江包と大西の綱かけ(2011年調査)

○大和郡山市八坂神社の綱掛け行事において、雄綱と雌綱を絡ませて一本の綱を作り、人柱を巻きつけてから竹の棒を通し、東明寺川の綱掛け場まで運んで掛ける。

○生駒平群町金勝寺では稲藁で作った40メートルの雄綱と12メートルの雌綱を和合した形で、橿原の集落を流れる龍田川をまたいで張り渡す。

これらの行事で作られた綱は「オス」「メス」の区別があり、明らかに大蛇として意識されている。また川をまたがったり、人柱を巻きつけたりするところには水神との関連が認められる。

また、同じく「ツナカケ」や「ツナクミ」などと呼ばれ、ノガミ行事の範疇に入れられた事例もある。行事は1,2月に行われる。その内容をみると、上の「綱掛け」とほとんど変わらないが、しいて区別すれば、綱をはっきりと「蛇」と認識した点にあるだろう(表2を参照)¹⁶。つまり、ノガミ行事の部類に入る一部の「綱掛け」は、藁の龍蛇を作り、村の外れにある大木にかける形態をなしており、5,6月の龍蛇の巡行行事と類似している。

○橿原市北妙法寺町の「ノガミ」では、藁の蛇を組み、半紙に農具の絵を書いて蛇の頭に差

し込む。そして「へび」を担いで村の田の畔を練り歩き、最後は八釣川のほとりの大木につりさげる。

○檀原市五井の「ノガミ」では、オスとメスの二匹の蛇を作り、頭を梢の方へ向けるようにしてヨノミの木に巻きつける。そして神酒一升と肴を供える。

○檀原市四条の「ツナクミ」では藁を集めて綱を作る。そして蛇がとぐろを巻いている形にして神社の境内におく。

○檀原市見瀬の「綱掛け」では、太い綱をない、コモを編み、フングリを作る（フングリは綱の真ん中に吊す）。そして檜の古木にかけ渡す。

○檀原市五条野の「綱掛け」では、農具の模型を作り、小麦藁に新ナワを編みこんで蛇の形のものを作る。森の檜（昔は松）の木に蛇体を吊る。

表2（1, 2月の藁の大蛇が登場するノガミ行事）

名称と地域	実施期日	信仰対象	呼称・材料等	行事の内容
1 北妙法寺のノガミ(檀原市北妙法寺町)	1月7日	農の神。(ヨノミの木)	へび。藁(5, 6間)	へびを組む過程で巻きあう。子供たちが半紙に道具の絵を書き、へびの頭へ差し込む。へびを担いで村の田の畔を運んで歩く。八釣川のほとりの大木につりさげる。
2 五井のノガミ(檀原市五井町)	1月15日	ツナクミ、ノガミ。(ヨノミの木)	蛇。(3m、耳2つ・舌)	オス・メスの二匹を作る。ヨノミの木に巻きつける。頭は梢の方へ。神酒一升と肴とを供える。
3 四条のツナクミ(檀原市四条町)	1月15日(昔は旧暦)	神社境内	綱。藁(109m)	藁を集めて綱を作る(現在は縄を買って形ばかりの綱をかける)。蛇がまいている形にしておく。
4 見瀬の綱掛け(檀原市見瀬町)	2月11日(昔は1月11日)	蛇。(松の木・檜の木。大蛇信仰あり)。	蛇。藁(太い縄3m)	太い綱をない、コモを編み、フングリを作る(フングリは綱の真ん中に吊す)。檜の古木にかけ渡す。
5 五条野の綱掛け(檀原市五条野町)	2月11日(昔は旧暦)	農家の守り神。檜。	蛇。小麦の藁・縄。	農具の模型を作る。小麦藁に新ナワを編みこんで蛇の形のものを作る。檜の木に蛇体を吊る。
☆ 箸中のノグチサン(桜井市大字箸中)	7月(夏の土用の丑の日)	野口さん、カンジョウさん。	綱。(7m)	綱を作り、紙に牛・農具の図を描く。出来上がると綱を青竹で担ぎ、供え物と描いた紙を持ってカンジョウへ行き、綱を納め、供え物を供える。

※奈良県教育委員会の「大和の野神行事」に基づいてまとめた。

北妙法寺町の行事は米田が「カンジョウカケ」から「藁蛇」への変容を主張する際あげた事例であるが、松崎憲三は「行事内容が類似しているからといって、片方から他方へ一方的に変遷したとは必ずしも言えない」と指摘し、その理由の一つとして「祭日が異なれば行事の目的・内容にもそれなりの相違があり、樽井が指摘するように、双方の影響関係も当然認められようし、また例外があるもののツナカケとノガミ行事は一応別物としておきたい。そうでなければ他地域に広がるツナカケをすべて網羅しなければならなくなるからである」と述べている。

筆者も松崎の観点に賛成するが、この「例外」事例をもう少し考察する必要があると思う。北妙法寺町の場合は1月に行われる行事であるが、行事の内容は5, 6月のものと同じである。地理的に見れば、北妙法寺町は藁の大蛇行事の分布圏内入っているのも、近隣の地黄町と小綱町の藁の大蛇行事の影響を受けた可能性が存在する。同様に、天理市箸中の「ノガミサン」(表

2の☆を参照)は、5、6月に近い7月に行われるものであるが、内容は1、2月のノガミ行事と共通している。これは同じように、「綱掛け」行事の分布圏に入っているので、江包と大西の綱掛け行事の影響を受けた可能性がある(図1を参照。□は5、6月のノガミ行事。○は1、2月のノガミ行事。◇は勧請掛け〔ツナカケ〕行事)。

上に挙げた、奈良県内の一般的な綱掛け行事、ノガミ行事としての「ツナカケ」「ツナクミ」、そして5、6月に行われる藁の大蛇行事の三種類の行事は、その形態からみれば、藁の綱・藁の綱と蛇・藁の大蛇という違いがあり、三者において蛇の外部特徴がだんだん顕著になっていく傾向がある。こうしてみれば、確かに米田が唱える「カンジョウカケ」から「藁蛇」への変容の可能性は存在する。しかし三種類の行事の根底にはいずれも水神の意識が流れている。早魃が多い奈良盆地の環境によって水神信仰が早くから発達した背景を考えると、逆方向の変容の可能性も排除できないだろう。すなわち次項で述べる雨乞いが盛んに行われる環境の中、雨乞いをするための藁の龍蛇の形態が定着して現在みられる藁の大蛇行事になり、さらにその影響で綱掛け行事に水神の要素を付与したことも考えられる。

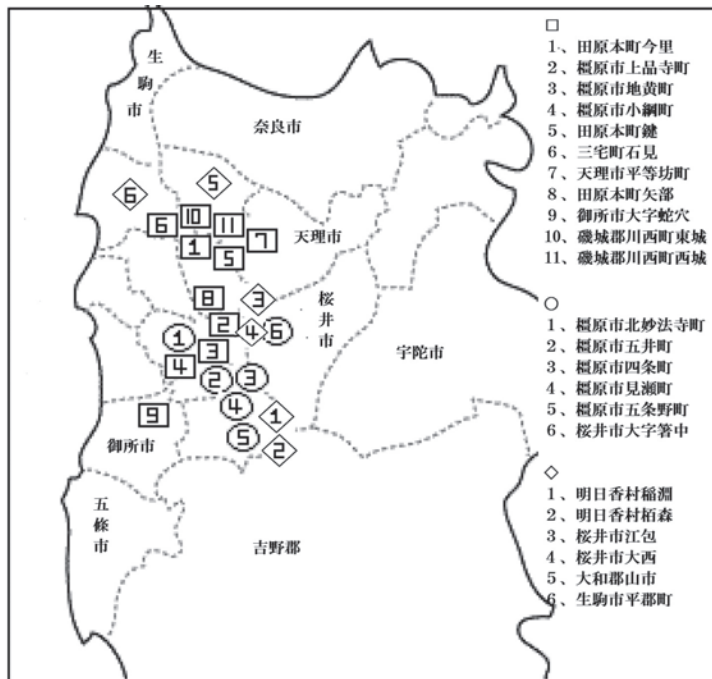


図1：奈良盆地における三種の行事分布図

(二) 雨乞い習俗

雨乞いの形態 水神を象徴する藁の龍蛇を作って祭り、村の中を練り歩き、最後には水神の居場所に送るという構造は、雨乞いの形態と共通しており、これらの行事の形成には雨乞い習俗の影響があった可能性は十分考えられる。

高谷重夫は『雨乞習俗の研究』において日本の雨乞い行事を網羅しているが、その中、龍蛇の象徴物を作って雨乞いをする事例は123例にのぼっており、北の青森県から南の宮崎県まで分布していることがわかる。これらの事例の中、蛇体を作る材料を明らかにしていないものも多くあるが、明示されたのを見ると実にさまざまである。しかし稲藁を材料にした例は大多数を占め、麦わらを使ったのも11例ある。大蛇を作って、池・川・海に漬ける、または流すのは71例、木・神社などに安置するのは14例、状況不明なのは38例である。また民俗芸能を伴ったり、水をかけたりするなど、一定の行動を伴いながら龍蛇を目的地まで移動するのは75例、目立った行動を取らずに龍蛇を目的地まで移動する、または不明なのは48例である。一定の行動を伴いながら移動する事例の中、田んぼの畦を巡回するのは数例あり、村の中を巡行するのも8例がある。

ここでは高谷重夫が掲げた事例の一つ引用しながら見ることにしよう。

○茨城県鹿島郡大洋村大蔵：青年三人が代表となって相熊の雷神に御幣をうけにゆく。村では福泉寺に藁を持ち寄り、代参の帰りを待って一斉に竜をつくる。直径30センチ、長さ5メートルの大竜である。これを裸で担ぎ、掛け声も勇ましくもみ合ったのち、本堂に入って天井裏に描かれた竜に水をかけ、村中を練り歩く。家々ではこれを待ち受けて水をかける。散々暴れた後、水で重くなった竜を引きずって二十三夜塔の四本松の下に納めた。

これらの雨乞い事例の基本的特徴をあげると、次のようにまとめられる。地域によって行事の主体は女性であったり、子供であったり、若者であったりすること。作られた藁の龍は一匹の場合と雌雄の二匹の場合があること。竜を担いで町や村の中を練り歩き、その過程で水をかけられたり、暴れたりすること。最後は川に流したり、池に投げ込んだり、木の下に納めたりすることなどである。水神を龍蛇の形にして村に出現させることで、現実的にも神が現れて雨をもたらさせるといった呪術的構図が見える。奈良盆地の雨乞いにおいても藁の大蛇が用いられ、また他の象徴物が用いられている。やはり高谷重夫の『雨乞習俗の研究』で挙げた事例を見よう。

①藁の大蛇を用いた事例：

○高市郡明日香村坂田では、氏神で藁の竜をつくり、僧を招いて心経百卷を繰り、これを担いで飛鳥川の淵に漬けたうえ、心経を唱えつつ再び氏神に帰る。

○同村島庄では大蛇を、松明を持って祝戸川まで送り、そこに漬けておく。

この2例は旱魃の時に行われたものであるが、5、6月に行われた藁の大蛇行事と形式、内容に違いは見られない。僧侶を招いて経文を唱えた形式は、5、6月の行事においてもかつて採り入れられたものである¹⁷。

②藁の大蛇以外の象徴物を用いた事例：

○奈良市の旧平城村押熊ではコウズイサンという雨の神（石神）を田の中に投げ込む。

○奈良県天理市萱生では、宮さんにある竜王の屋形を池の中へ担ぎこみ、泥水をかける。または竜王を池に投げ込む。

○奈良県吉野郡天川村和田では永豊寺の雨乞い仏を背負って寺の後ろの川に漬け、子供たちが裸で水を浴び、仏にもかける。

○奈良県磯城郡三宅町但馬ではタドさんの祠を持ち出し、水をかけ、四人で担いで「雨下されタドさん」云々と唱えて村を廻る。

この中の「コウズイサン」「竜王の屋形」「仏」「タドさんの祠」は藁の大蛇と同じく水神の象徴物であり、その水神に対する扱ひも藁の大蛇の巡行過程で見られる「暴れ」と同じ性格のものである。

実際5、6月の行事も雨乞いとして意識された事例もあるのだから（天理市平等坊町・橿原市地黄町）、水が絶対的に不足な奈良盆地に毎年のように行われた雨乞いが、5、6月の行事として定着したことが考えられる¹⁸。『大和の民俗』では、奈良盆地が古くから雨が少なかったので、水利慣行が発達したことを紹介し、「県下全般1万3千余のタメ池や大小幾多の井ぜきは、長い歴史時代を通じて多くの資材と労力を費やして築造したにもかかわらず、用水はなお不足し、その分配にあらゆる工夫をしていることは全国でもまれにみる特異な地域である」と述べている¹⁹。龍蛇信仰及び雨乞いはこの地域において重大な意味を持ち、農耕を営む人々の中に深く浸透していたことは十分想像できる。昔の野神行事を紹介した資料では、労力と経済の面で負担がかかるため、行事を取りやめたのを、行事から快樂を経験した村の若者たちは様々な行動を取って、無理やりに行事を行わせる境地に大人たちを追いこんだことを述べている。また行事を取りやめると疫病がかかり、あるいは不作になるなどといった言い伝えも、定期的な行事として固定する過程に生まれたものであり、その一助けになったかもしれない。

野神塚・神木信仰 5、6月の藁の大蛇行事において、最後は藁の大蛇を塚・森・木に安置するが、具体的な場所はヨノミの木（榎木）〈8例〉、ナツメの木〈1例〉、榎の木〈1例〉、祠の裏〈1例〉になっている。榎木について日本各地に様々な伝説が伝えられ、神木として意識されている。柳田国男の「争ひの樹と榎樹」ではこれを取りあげ、奇異な現象として、榎の木を切るとタタリがある、木から血が出る、切り痕がなくなるなど様々な怪異が起こること。猿のような頭をした蛇が住んでいること。榎の空洞に涸れぬ泉があることなどを挙げている²⁰。榎木と蛇、榎木と水は深い関係が存在することが分かる。奈良盆地においても榎木は龍蛇の住処になっているので、そこに藁の大蛇を安置することは、日本全国の雨乞い行事の中、最後藁の龍蛇を川・池に入れることと同じような意味を持つ。また藁の大蛇以外の野神行事においても、野神塚・「一本木さん」を水神の住処として認識されるものがあり、「一本木さん」と呼ばれる以外の場合においても木と関係する事例が多く、また実際の塚（石）の場合でも水神と関係し、雨乞いの対象になっているものがある。たとえば、東坊城町のノガミ行事は水の豊富を

祈るものであり、今里町・岩室町・油坂・京終ではノガミを対象に雨乞いをしている。木は水神の分身として扱われ、石(塚)やノガミの森は蛇のすみかになっており、そこに水神の白蛇(大蛇・ミーさん)が住んでいて雨乞いの対象になっているのである。奈良盆地のノガミ行事において、雨乞いと関連する事例が広く分布していることがわかる。藁の大蛇行事と同様、雨乞い習俗の影響下に形成されただろう。

第四章 まとめ

以上のごとく考察した奈良盆地の藁の大蛇行事を整理すると次のとおりである。

(1) 田植えが開始する前の5、6月(昔は端午の節句)に、「当屋」という農村祭祀組織の元で、子供を主体にして行われた行事である。

(2) 各村の行事には自分なりの特徴をもっているが、基本的には大蛇の製作と祭り、村中の巡行、大蛇の安置という三つの部分からなっている。

(3) 信仰対象は水神的性格・守り神的性格・崇り神的性格の多重的性格を持ち、五穀豊穡をもたらし、人々を災厄から守ると同時に、不敬な行為があると祟るといった横暴な一面もある。

(4) 行事はあらかじめ雨水豊富を祈願する目的で行われ、水神を顕在化してその生態を演じるといった芸能的要素も帯びている。

(5) 藁の大蛇及びその行事の発生・展開過程において、関係行事との比較を通して、ある程度その源流を辿ることができる。すなわち、綱掛け行事から変容した可能性もあり、雨乞い習俗から変容した可能性もあるが、後者の可能性が高いとのことである。同じ奈良盆地の野神塚・神木にも水神的性格を持つものがあり、雨乞い行事として行われたものがあるので、同じく雨乞い習俗の影響を受けたものと見ることができる。

高谷の雨乞い研究では奈良盆地におけるノガミ行事の藁の大蛇に触れていない。完全に別の性格のものとして扱われているようである。奈良盆地のノガミ信仰を研究する研究者も藁の大蛇に触れる際「水神」「水霊」を象徴したものと述べ、風雨順調の意味が含まれていると指摘しているが、雨乞い習俗からの影響は言及していない。雨乞いは早魃のときに行われるもので、定期的に行われる藁の大蛇行事とは異なるものとして意識されたかもしれない。

しかし上で述べたように奈良盆地の自然環境によって、水神信仰が発達し、雨乞いも盛んに行われてきたのであり、関係行事との比較からも藁の大蛇行事の発生・形成過程において、雨乞い習俗の影響はかなり大きかったことがうかがえる。現在定期的行事になっているものもそれが定着するまで、不定期で行われた時期があったはずである。早魃の時の解決策として藁の大蛇を作って雨乞いをするものと、あらかじめ雨水豊富を祈願する予祝的性格を持つという違

いはあるが、いずれも雨乞い習俗として見ることができ、奈良盆地における藁の大蛇行事は地域的特色を持つものとして位置づけることができる。

高谷の研究によると、平安時代に竜神を信仰対象とした祈願祈雨法が確立し、中国の土龍祈雨法も宮中で実施されたとのことである²¹。また茅で竜神をかたどった祈雨法も早くから存在したようである²²。これらの記録から仏教的祈雨法が効果のない時に、この呪術的祈雨法が用いられたことが分かる。中世において竜神信仰はますます普及し、雷神が蛇形をもって現れるとする古代の観念はこの時代にも引き継がれる。武蔵荏原郡大森村岩正寺の二世法密上人は法力の勝れた僧であったが、永享元年（1429年）日照りに藁で竜頭を作って祈願し、これを海上にはなったところ、忽ち雨が降ったとある²³。おそらく雨乞いに藁の竜頭が用いられた例として、この記録は最も古いだらう。文化・文政（1804～1829）の成立とされる『大和高取藩風俗問状答』には、奈良盆地葛上郡蛇穴村の事例が紹介されており²⁴、嘉永7年（1854年）銘の『野口大明神社記』にも蛇穴の野口行事の由来や行事の様子を紹介している²⁵。この時期、ほかの地域においても藁の大蛇に関する記録がみられるので²⁶、近世の雨乞い主体が農民であった点と大きく関係していると思われる。藁の龍蛇を作って巡行する形はこのように近世の農民の手で作られ、現在まで伝承されてきたのであろう。

第五章 日本と中国における龍蛇信仰及び雨乞い習俗の比較研究展望

龍は中国の古代に生まれた空想上の霊獣であり、川や池などに住み、雨を降らす能力を持ち、空を飛ぶ能力を持って、時には雨を降らせたり、時には神仙の世界を行き来したりすると信じられてきた。蛇を基本モデルにしなが、多くの動物の特徴を融合したものである。歴史の変遷の中で、龍は多様な性格を持つように展開していくが、雨の神・水の神としての性格は変わらずに生き続けてきた。

殷代の甲骨文に龍を作って雨乞いをした記録があり²⁷、漢代には土龍を作って雨乞いをする方法が確立する²⁸。東漢以降、仏教の伝来につれて、仏教と道教による宗教形式の祈願祈雨法が確立し、土龍による祈雨法は民間だけで用いるものになっていき、近代になっても確認されている。藁の龍蛇を作って雨乞いをする方法はいつから始まったか、確かな記録は見えないが、四川省の『榮県志』には県内の五龍山に唐の乾符元年（874年）に立てた石碑に、当時「舞龍」を行った結果雨が降ったと刻まれたことを挙げている²⁹。この地域は旱魃の多い地域で、古くから藁などの材料で龍蛇を作って雨乞いをする「水龍」と呼ばれる祭りが盛んであった。土龍は担いで舞うことができないので、唐代の「舞龍」に用いられた龍は藁などの材料で作られた可能性がある。

藁で龍蛇を作って雨乞いをする中国の事例は、高谷をはじめ、日本の研究者はその存在を確

認できなかったが、実は中国の長江流域やその南に広く行われたことが清代・民国時代の地方誌などに散見する。また中国の各地に行われる「舞龍」はよく知られ、現在はお正月や慶事の時に舞うものになっているが、藁などで作られた「草龍」（藁も「草」と呼ぶ）から発展したものであり、元来は雨乞いのために舞ったことが調査資料などから伺える。

筆者が2008年広西チワン族自治区龍勝県平等郷広南村で調査をした時、藁の龍を作って巡行する行事の存在を知った。この村では年に二回この行事が行われていた。一回目はお正月の二日から十五日までで、もち米の藁で長さ24メートルの龍を作り（写真8）、「龍珠」を持つ者の引率で、付近の村の家々を回りながら「舞龍」をしたという。その時は各家の「堂屋」に祭られた先祖に向けて礼をし、それから「龍歌」を歌う。最後は川辺に持って行って、藁や飾りを



写真8：広西・龍勝広南の草龍（2008年調査）

剥して焼き、竹で作った枠組みだけを持ち帰って鼓楼などの場所に保管し、翌年に使うようにした。二回目の行事は6月6日であるが、このときは藁で長さ10メートルぐらいの龍を作る。舞いながら田圃を巡回し、山頂の水神を祭るところで舞をして山を下りる。最後は川辺で「草龍」を焼き、「海」へ送る。このときの行事は雨乞いと害虫駆除のために行うものであるという。

広南と同じように、運よく伝承が続けられたところも少なくない。雨乞い行事は迷信として禁じられ、それを舞踊として改造されたものも少なからずある。その一部は20世紀80年代から全国規模で行われた舞踊調査の際に収集され、『中国民族民間舞蹈集成』「舞龍」の部類に収められた。また1995年に編纂が始まった『中華舞踏志』は同じような趣旨のもので、古老から聞いた話や言い伝えなども収められている。この二つの資料からわかるように、「草龍」行事の伝承地域は、基本的には長江流域及びその南の地方であり、稲作が行われる地域とも一致している。途絶えた行事を古老たちの指導を受けながら復活した地域もあり、現地調査は可能である。今後は中国における現地調査を実施しながら、日本との比較を進めていきたいと思う。

主要参考文献：

- 1、島本一『高取藩風俗問状答』、昭和14年、大和国史会
- 2、辻本好孝『和州祭礼記』、昭和19年、天理時報社
- 3、山田熊雄等『大和の年中行事』、昭和44年、大和タイムス社
- 4、岩井宏實『奈良祭事記』、昭和47年、山と溪谷社
- 5、田原本町史編纂委員会『田原本町史』、昭和61年、田原本町役場

- 6、奈良県史編纂委員会『奈良県史』、昭和61年、名著出版
- 7、奈良県教育委員会『大和の野神行事』、昭和60年
- 8、高田健一郎『大和の祭り』、平成3年、向陽書房
- 9、奈良県立民俗博物館『龍蛇のまつり・伝説』、平成4年
- 10、加藤健司『日本祭礼民俗誌』、2005年、おうふう
- 11、高谷重夫『雨の神』、1984年、岩崎美術社
- 12、高谷重夫『雨乞習俗の研究』、2004年、法政大学出版局
- 13、笹間良彦『龍の歴史大事典』、2006年、遊子館
- 14、宮崎清『藁』Ⅰ・Ⅱ、1985年、法政大学出版局
- 15、中国民族民間舞蹈集成編纂部『中国民族民間舞蹈集成』、20世紀80年代～現在、中国舞蹈出版社
- 16、中華舞蹈志編集委員会『中華舞蹈志』、1995年～現在、学林出版社

注

- 1 中国において、龍は蛇と混同する場合が多く、同じ類の意味で古くから「龍蛇 (long she)」という言葉が使われた。日本においても古くから「竜」と「蛇」を同類として見る傾向があった(『斎然元呆唱和詩集』斎然の詩に「無熱蛇竜尚有靈」とある)。また中国の龍の信仰が日本に伝わり、日本古代の雷の神「タツ」のイメージと重なり、タツの当て字である「竜」が使われるようになったが、日本では固有の蛇の信仰も生き続け、雷神と一体であると意識されてきた。奈良盆地の事例において藁の大蛇はそれであり、「ジャ」と訓読みすることからも、龍と対等の「神格」を持つと意識されたことが読み取れる。本稿では各事例に即して現地の呼び方を使うが、日本と中国の事例を包括する場合は「龍蛇」という言葉を使うことにする。
- 2 文化庁の「国指定文化財等データベース」において、「大和の野神行事」の解説では、野神は全国的に広く信仰され、とくに大和盆地や琵琶湖周辺に顕著な分布を示すと述べている。『全国年中行事辞典』(三隅治雄編、今泉弘勝発行、平成19年)には、奈良盆地に分布した野神の「塚」の数が40か所近く確認できたとしている。
- 3 ほぼ同じ内容は『中和郷土資料』にも収められている。
- 4 『日本常民文化紀要』27号、成城大学大学院文学研究科、2009年。
- 5 博士論文、奈良女子大学大学院、平成21年。
- 6 村の中を巡行する途中、村の役職の家を訪問し、その一家の人を取り巻く形で一周回る。
- 7 2010年の調査では、昔の池が埋め立てられ、巡行する途中数回バケツの水を蛇に「飲ませる」ような形になっている。
- 8 現在は藁の大蛇を神社にある井戸の上にとぐろを巻く形で納めている。
- 9 桜井徳太郎『民間信仰』、昭和49年、塙書房。
- 10 保仙純剛「野神の信仰」『日本民俗学』98号、1975年、日本民俗学会。

- 11 山田熊夫等『大和の年中行事』、昭和44年、大和タイムス社。
- 12 中国の歴史書『史記』に西門豹が地方官吏として鄴という地方に派遣され、毎年河伯（黄河の水神）のために若い娘を河に沈める習俗を廃止したことが記されている。枚方市にも淀川の堤防を築くため、人柱を犠牲として水神にささげる伝説があり、日本各地に人柱の伝説が残されている。
- 13 奈良県教育委員会の『大和の野神行事』。以下出所を示していない部分はいずれもこの資料集による。
- 14 辻本好孝『和州祭礼記』、昭和19年、天理時報社。
- 15 米田豊「野神についての一試論」『近畿民俗』76号、昭和53年、近畿民俗学会。
- 16 ここでは「綱掛け」行事の中、「ジャ」として意識された事例だけを挙げた。
- 17 今里の場合は1944年、1969年、1972年の資料に「般若心経三巻を読誦する」との記録がある。
- 18 奈良県に昔から盛んに雨乞いを行った事実があり、その痕跡が多く残されている。高谷重夫の『雨乞習俗の研究』に載せたものを拾い上げると、「龍穴」「龍池」と呼ばれる龍の住处といわれるところがあり、そこで雨乞い行事が行われた事例、人里からやや離れた自然の山や池などが雨乞いの対象になった事例、寺の起源にかかわる話として竜にちなんだ伝説などがある。『大和高取藩風俗問状答』にも6月に行われる雨乞い踊りなどの行事が紹介されている。
- 19 近畿民俗学会『大和の民俗』、昭和34年、大和タイムス社。
- 20 『定本柳田国男集』第十一巻、昭和38年、筑摩書房。
- 21 高谷『雨乞習俗の研究』（望月『仏教大辞典』）。
- 22 966年元杲が神泉苑で7日間祈雨の修法をしても雨が降らなかったため、茅竜を作り供養祈請したところたちまち雨が降り、雷雨が来たとの記録があり（成賢筆『祈雨日記』、平安時代、祈雨の過程を記録したもの）、1152年空海と修円が験力比べの場面で「美濃国間落草竜。今案は大師以茅作竜呪上也」という記録がある（『弘法大師伝』第一、長谷寶秀編、1977年復刻）。
- 23 高谷『雨乞習俗の研究』－『新編武蔵風土記稿』巻6。
- 24 中山太郎編著『諸国風俗問状答』、昭和14年、東洋堂。
- 25 谷川健一『日本庶民生活史料集成』第26巻、1983年、三一書房。
- 26 『相生集』には磐城の郡山の話として、藁で竜を作り数人にてこれを担ぎ、篠で水を撒きながら市中を回るとある（天保12年〔1841〕年に完成。高谷『雨乞習俗の研究』）。
- 27 「其乍龍凡田、又雨」（裘錫圭「説卜辭的焚巫尪与作土龍」『甲骨文与殷商史』、1983年、上海古籍出版社）。
- 28 『山海経・大荒東経』には「旱而為応龍之状、乃得大雨」があり、郭璞は「今之土龍本此」と注を施している。漢の董仲舒の『春秋繁露・求雨』には四季折々に土で龍を作って雨乞いをする方法が記録されている。その他の文献からも、漢代には広くこの土龍による祈雨法が行われたことが分かる。
- 29 『中華舞蹈志』四川巻、2007年、学林出版社。

(にう・ちえんびゃお 国際言語学部准教授)